

## 2) 張網採捕による山の下湾の魚介類相の把握

井嶋重尾・孝橋賢一

【背景・ねらい】温水魚の産卵場における各種魚介類の生息状況を調査することにより、食害生物の生息状況等産卵環境を把握し、産卵場の保護・改善策策定の基礎資料とする。

【成果の内容・特徴】昨年に引き続き、大津市衣川地先の山の下湾内の御呂戸川河口周辺においてヨシ群落前面(No.1)、河口前面(No.2)、マコモ群落前面(No.3)の計3カ所に張網(垣網目合25節、袋網目合4mm角)を設置し、魚介類を採捕した。採捕は平成6年4月4日～平成7年3月23日の間に計28回行ったが、No.1とNo.3は夏期以降、渇水により干上がったため8月19日までしか調査できなかった。採捕魚介類は種類毎に個体数および重量を測定した。

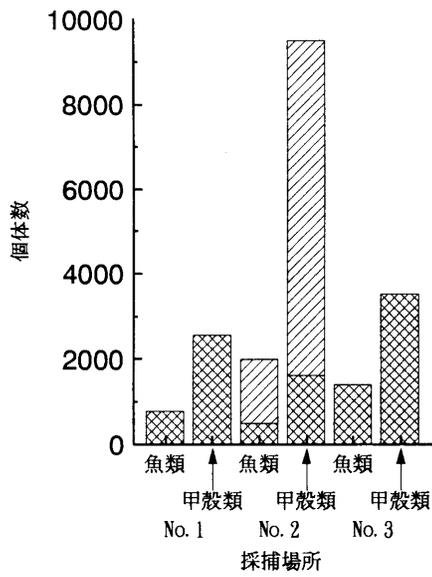
その結果、通年で採捕された魚介類はNo.1で19種、No.2で22種、No.3で23種、合計27種であった。採捕個体数はNo.1で魚類796尾、甲殻類2,568尾、No.2で魚類2,015尾、甲殻類9,495尾、No.3で魚類1,414尾、甲殻類3,535尾、合計で魚類4,225尾、甲殻類15,598尾で総個体数は19,823尾であった(図1)。また、重量はNo.1で魚類16.6kg、甲殻類70.6kg、No.2で魚類17.3kg、甲殻類17.0kg、No.3で魚類20.1kg、甲殻類54.3kg、合計で魚類54.0kg、甲殻類141.9kgで総重量は195.9kgであった(図2)。また、8月19日までの調査結果を基に特徴的なことを挙げると、昨年はヨシ群落前面および河口前面で魚類が、河口前面およびマコモ群落前面で甲殻類が多く採捕されたのに対し、今年は3カ所とも甲殻類が多かった。

魚介種ごとの個体数ではテカヒが最も多く、次いでアメリカザリガニ、オカハス、ブルキルの順で、これら4種で全体の96.1%とほとんどを占めていた。重量ではアメリカザリガニ、ブルキル、オカハスの順で、これら3種で全体の92.0%を占めており、特定魚介種が多い事が今年の特徴であった。

時期別の特徴としては、4～5月にブルキル、オカハスの親魚と思われる比較的大型のものが来遊し、6～7月にオカハス稚魚が多数採捕された。また、6～8月にはアメリカザリガニが大量に採捕され、8～翌1月にはテカヒが多数採捕された。2～3月頃には小型のブルキルが比較的多く採捕された(図3、4)。

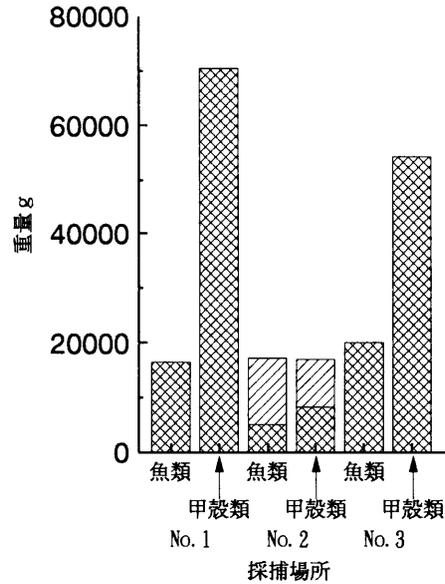
なお、本年はコウソウの親魚と思われる体型のものは3尾しか採捕されなかった。本調査により年級群の経年推移を把握し、資源動向指標に活用する事が困難であることがうかがわれた。

【成果の活用・留意点】温水魚への影響に着目すると、ブルキル、オカハスが温水魚の産卵繁殖時期に多く採捕された。特にオカハスは、昨年に比べて稚魚が多数採捕された。オカハスの増加はコウソウ資源に対する食害の影響の増大が考えられる。今後のオカハスの漁獲量の推移等資源量の指標となる情報に留意する必要がある。



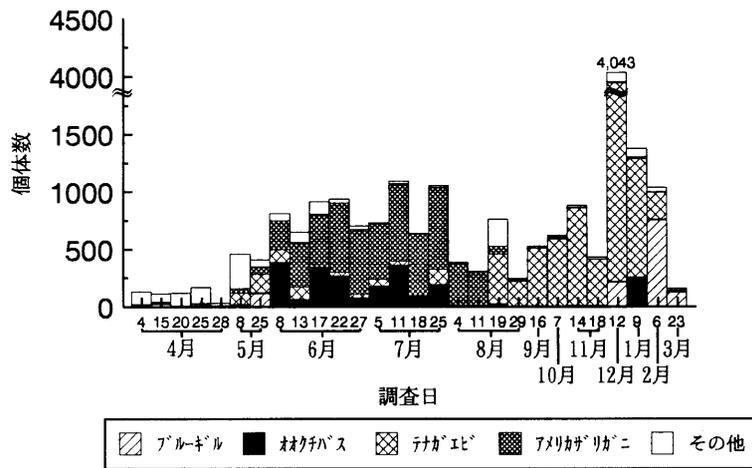
4~8月
  9~3月

図1 場所別採捕個体数.



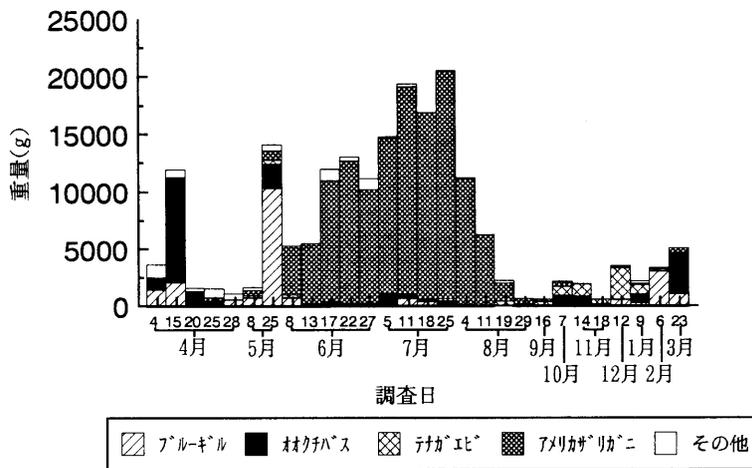
4~8月
  9~3月

図2 場所別採捕重量.



ブルキール
  材がハス
  テカエビ
  アメリカザリガニ
  その他

図3 主要魚介類個体数の推移.



ブルキール
  材がハス
  テカエビ
  アメリカザリガニ
  その他

図4 主要魚介類重量の推移.